

ローマ中央修復研究所の記録文書保管所における資料調査

宮下睦代*

Document Investigation from Central Institute for Restoration of Rome

Mutsuyo Miyashita*

The mural paintings of San Vito Vecchio Church and Padre Eterno Church in Gravina in Puglia were removed to the museum using Massello method in 1957. The original locations of mural paintings were no longer able to see but I tried to understand based on the document investigation from Central Institute for Restoration of Rome. In this chapter, I will make discussion and show the photo to compare before and after remove.

Key Words: Massello, comparison of mural paintings between before and after the restoration

キーワード: マッセッロ法, 壁画の修復前後比較

1. はじめに

2011年9月、グラヴィーナ・イン・プーリアで実施したフィールド調査の際には、エットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館の協力を得て、2階の図書・文献資料室で先行研究などの多くの文献資料を収集することができた。また、同館では撮影時期こそ不明だが、パードゥレ・エテルノ教会の壁画が切り出される以前の貴重なモノクロ写真も見つけることができた。しかし、ローマ中央修復研究所(ICR)がマッセッロ法で壁画を切断して移動した1957年当時の教会や壁画の現状記録、および壁画の調査診断記録、マッセッロ法による壁画切断に関する作業記録、あるいは同博物館内の特別室に切断した壁画を再構築して保存するに際しての具体的計画についての資料は、現地に何ひとつ残されていなかった。

そうした現地での記録資料調査の限界に新たな可能性が見えたのは、『1950～60年代における壁画保存のための移動』(チェチリア・メテッリ著 2006/07年度ローマ・トゥレ大学学位論文)に所収されていたローマ中央修復研究所の記録文書保管所(ASICR: Archivio Storico Istituto Centrale del Restauro; tutti i documenti fino al 1966)に保存されているいくつかの「グラヴィーナ関係資料」(fascicolo Gravina)であった。それらはほとんど文化財監督局との連絡記録資料(書簡)であったが、その中でマッセッロ技法に関するものは既に『2011年度 研究調査報告書』¹に採録した。

1957年に実施されたマッセッロ法による壁画の切断と移動が実際にどのようなものであったのかを調べるため、ローマ中

央修復研究所に当時の修復記録や写真資料の閲覧を申し込んだ。そこはトラステヴェレ地区のテヴェレ川沿いに建つ ex-Ospizio S.Michele a Ripa Grande (サン・ミケーレ教会にあった巡礼者のための旧宿泊所)の複合的な大きな建物の中にあり、ピエトロ・カヴァッリーニの壁画で知られるサンタ・チェチリア・イン・トラステヴェレ教会の前の走る長いサン・ミケーリ通りにある。通りに沿ってオーカー色の長い壁が続き、そこには文化財保存修復国際研究センター(ICCRUM: Centro Internazionale di Studi per La Conservazione ed Il Restauro dei Beni Culturali)、ローマ建築物・景観文化財保護局(Soprintendenza per I Beni Architettonici e per Il Paesaggio per Il Comune di Roma)、国庫省(Ministero del Tesoro)、文化財活動省(Ministero per I Beni e Le Attivita Culturali)、文化財・環境省(Ministero per I Beni Culturali e Ambienti)などの入口が連なっている。

23番地が文化財・環境省 中央修復研究所(MINISTERO PER I BENI CULTURALI E AMBIENTALI ICR: ISTITUTO CENTRALE DEL RESTAURO)で、受付で予約の確認をして入館証をもらい、記録文書保管所(Archivio dell'ISCR)の責任者マルコ・リッカルディさんの案内で、複雑に連結された建物の迷路のような細い廊下や中庭をいくつも抜け、階段を上ったいちばん奥の資料閲覧室に通された。スチール製のロッカーがずらりと並んだ部屋のテーブルには、申請しておいた分厚い2つのファイルがすでに用意されていた。1つはグラヴィーナ・イン・プーリア市のサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画に関する資料ファイル(Fig.1)、もう1つは同市のパードゥレ・エテルノ教会に関する資料ファイル(Fig.2)で、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画に関する資料ファイルには3つの束が、パードゥレ・エテルノ教会に関する資料ファイルには2つの束が入っていた。

* フレスコ壁画研究センター

* Research Center of Italian Mural Paintings

2. サン・ヴィート・ヴェッキオ教会

2.1 壁画に関する資料ファイル

表紙：中央修復研究所 記録文書保管所 N.AS0165/01(1)
N.E.115 (A1403)

所在地：グラヴィーナ・イン・プーリア (バーリ)

エットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館

出 所：グラヴィーナ・イン・プーリア (バーリ)

サン・ヴィート・ヴェッキオ地下礼拝堂

対 象：装飾壁画 漆喰 / 絵画 宗教的テーマ
分離された壁画 (DIPINTI MURALI STACCATI)

ファイルの中には表紙の付いた以下の3つの束：

関係書類 N.AS0165/01(A1403) N.E.115

モノクロ写真 R554～R560 (当時の町の風景写真 計7枚)

関係書類 N.AS0165/01(A1403) N.E.115

修復段階：前

資料：モノクロ写真 R493～R497, R505～R547, R561 (サン・
ヴィート・ヴェッキオ教会の外観および壁画の写真 計49枚)

関係書類 N.AS0165/01(A1403) N.E.115

資料：図 7806～7809 (平面図, 側面図, 正面入口図など計4枚)

ほかに測量図, マッセッロ法での切断を示す図, 博物館に壁画
を再構築する際に描かれたと思われる図などが順不同で42枚。

なお, 同ファイルには新聞の切り抜きや展示用解説資料など数
点在中。

2.2 写真資料

モノクロ写真(6x6サイズ)はA4の台紙にいいいに貼られ,
右上に番号が書かれて, そのうちの2枚(R.510, R.538)は透明
ファイルに入れられ, 下に次のようなラベルが付されていた。

日付：05/06/2009

撮影日：15/06/1957

ネガ番号：R538

修復段階：前

関係書類 N. : AS0165/01

註：グラヴィーナ (バーリ) サン・ヴィート・ヴェッキオ地下
礼拝堂 後陣

以下に, 上記の写真資料の検証から判明, ないしはかなりの
確かさで推測される点を列挙する。

・R.510, R.538 のラベルから, これらの写真は壁画を切断して
移動する前, 1957年6月15日に撮影された写真であることが
わかる。

・サン・ヴィート・ヴェッキオ教会脇に停めてある自動車の写
真があることから, 周囲には現在見られるような塀はなかった
と思われる。(Fig.3)

・正面入口は, 現在のファサードに境目の痕跡がある位置まで
埋まっており, 左側には石が積まれ, 正面の開口部は木製の扉
で閉ざされていたことがわかる。(Fig.4,5)

・切断される前の写真とエットーレ・ポマリチ・サントーマジ
財団博物館に展示されている現在の壁画とを比較してみると,
壁画を壁体の凝灰岩ブロックごと切断する技術はすばらしく,
切断の際に亀裂がひろがったり, 切断したために切断部の壁画
が失われたと思われる箇所はまったく見つからない。(Fig.6,7)

・当時, 壁画は相当に傷んでいたが, 移築前後に施された応急
処置, 洗浄や修復処置により描写画像はかなり鮮明になった。
また, 欠損部分を目立たなくするための補彩も, 修復措置とし
て少なからず行われた形跡がある。(Fig.8,9,10,11)

・2011年9月の調査で確認されていた, サン・ヴィート・ヴェ
ッキオ教会の洞窟壁画にかすかに残るインプロンタから, 「聖マ
ルティヌス」が描かれていた位置は右側壁に穿たれた小さな壁
龕の上方, かなり高い位置であったと推論していたが, それを
当時の写真からも裏付けることができた。(Fig.12,13) つまり,
博物館内に位置を間違えて再構築されたか, 再構築に際して位
置を変更する何らかの(構造的)必要性があったかである。

2.3 図面資料

作製された手書きの図面を見て驚いたことは, かなり詳細な
測量に基づいて几帳面に書かれていることである(Fig.14, 15,
16)。正面入口を示す図(Fig.17)は正確で美しく, 立面図, 平
面図はシンプルかつ明快に表されている。そこには, 「materiale
(堆積物)」、「tolto materiale (堆積物の除去)」、「taglio 切
断した部分」、「taglio non completo 切断が終わっていない部分」
が色鉛筆で塗り分けられ, 「catena nel tufo 凝灰岩にチェーン」
を用いた箇所の記号や実施日(年の記載なし)が書き込まれて
いた。(Fig.37,38,39,40,41) 順不同で入っていた42枚を日付順
に並べ, 立面図, 平面図の色分けや書き込みを整理してみると,
マッセッロ法によってどの部分から始めてどのような順で切断
していったかがわかってきた。

作業工程は, 「pulitura 洗浄」, 「velatino 布(ヴェール)で
覆う」, 「tela sangalina 布(サンガリーナ)で覆う」, 「taglio 切
断」, 「stacco 分離」の順で示されている。(Fig.42,43,44,45,46)

ここで用いられている用語の「stacco スタッコ」は, 上塗り
漆喰のイントーナコ層全体を下塗り漆喰のアッリッチョ層から
剥ぎ取る(現行の語法としての)スタッコ法のことではなく,
「壁画を壁から分離する」という意味で使われていることに注
意したい。そして, 壁画の描かれた壁をいくつかのブロックに
切断し, その背面をそぎ落として一定の厚さに整えて壁画を移
動する技法としての「massello マッセッロ法」という言葉は,
ここではどこにも使われていない。

・ブロック切断は後陣の外周アーチに開いた穴(天井の開口部)
から装飾フリーズ部分を左下へ, そして右下, 次に左壁入口付
近から奥へ, 途中右壁奥に移って入口方向へ, そしてまた左壁,
右壁へと移り, 最後に後陣部分といった順序で, 6月24日から
10月10日まで, およそ3ヶ月半ほどかけて実施されている。
マッセッロ法による区分図に切断の日程を記入し, 作業順を記
したものを展開図にまとめておく。(Fig.18,19,20)

・マッセッロ法で切断する位置は、描かれた壁画の図像プログラムの枠線に沿った方が、切断の傷痕が目立たないはずである。左壁面の3人の聖人たちは首の位置で切断されている。現状でもそうだが、当時の写真でも壁面には亀裂が入っていた (Fig.6, 21,22)。一方、4人目の聖人には首の位置の亀裂はないが、(写真を見ると)腰のあたりに亀裂が入っており、そこで切断されている。また、この4人の聖人群像の右側に描かれている「墓の前の3人のマリア」をみると、そこにも横一線の亀裂が入っていて、かつ右端の「墓を指さす天使」の腰のあたりで亀裂は右下に分岐している (Fig.23)。この亀裂に沿って(あるいは亀裂を利用して)切断したのではないかと予測していたが、作業工程図には上下2段で切断したことになっている。これだけ大きな亀裂をそのまま無視して、下段を一ブロックとして移動してきたのだろうか。壁画の背面を20cmの厚さで切断した時には一体化していたブロックも、その後で2cmまで背面を削いでいく際には自然に分離してしまいそうである。また、同じ左壁面に、同程度の大きな亀裂が左から3人目の聖人の腰のあたりに水平に入っているが、図面によれば、この亀裂も切断ラインには利用されていない。深い亀裂をなぜ切断ラインに利用しなかったのか、また、その深い亀裂をどのように処理したのか、作業工程図を見ただけでは、簡単に疑問は解けない。

・マッセッロ法による区分図 (Fig.24,25,26,27)を見ながら、展示されている壁画の写真を観察してみたが、切断部の継ぎ目がなかなか見つからないのに驚かされた。

・左右の壁画全体をブロック区分図と合わせてみると、横線はほとんど亀裂の位置で切断したことがわかる。縦線は柱やフリーズ装飾の枠に沿って切断したために(切断の)痕跡はわかりにくく、補った色の違いや斜光線調査で何カ所かは確認できる (Fig.28)ものの、概して痕跡の追跡は容易ではない。ただし、後陣の「パントクラトルのキリスト」に関してだけはブロック区分図の線を明確にたどることができる。とくに腹部を中心に浅いY字型に切断されたラインは、補った色の違いから確認できるが、その線はきわめて細い (Fig.29)。マッセッロ法の実施から想像される切断作業による壁画の欠損は実際にはほとんどなかったようで、その切断にはかなり薄刃の道具を使ったと思われる。イタリアにおける壁画修復保存の技術として「伝統的手法」ではなかったマッセッロ法は、壁画をブロックごと切断するという大胆な技法にもかかわらず、切断の際に壁画が剥落したり、既存の亀裂が広がったりすることもなく、切断部の壁画が失われることもほとんどなかったという事実は驚くべきことであった。

しかし、これらマッセッロ法を利用したの洞窟教会からの壁画の切り出し移動という文化財保存の方法は、時代の変化の中で思わぬ運命をたどる。上述のように、少なくとも南イタリアに多く散在する洞窟教会に描かれた壁画群の保存に対しては、ストラッポ法やスタッコ法以上に危険性の低い、保存効率の高い技術であったにもかかわらず、あるいは(サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画がアテネやブリュッセルなどを巡回展し好評を博したことから)世界的にも一定の評価が与えられていたにもかかわらず、その数年後の1964年にはヴェネツィア憲章が高らかに打ち出されたことで、批判的になってしまった

観がある。

1931年のアテネ憲章を批判的に継承した歴史的建造物の保存・修復に関するユネスコ憲章として、1964年に開催された第2回歴史的記念物の建築家・技術者国際会議で採択されたのがヴェネツィア憲章で、翌1965年には世界遺産の選定を行う機関ICOMOS (International Council on Monuments and Sites) が設立された。ヴェネツィア憲章では歴史的建造物を修復する場合は、建設当初の部材を尊重すること、損なわれた箇所を補足する場合は推測ではなく科学的な根拠のある復元とすること、当初からの部材と修復された部分が明確に区別できるようにすることなど、保存・修復にあたっての基本的な理念が記述されている。

3. パードゥレ・エテルノ教会

3.1 壁画に関する資料ファイル

表紙:中央修復研究所 記録文書保管所 N.AS0165/02
N.E.115 (A1403)

所在地:グラヴィーナ・イン・プーリア (バーリ)

エットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館

出所:グラヴィーナ・イン・プーリア (バーリ)

パードゥレ・エテルノ地下礼拝堂

対象:装飾壁画 漆喰/絵画 宗教的テーマ

分離された壁画 (DIPINTI MURALI STACCATI)

ファイルの中には表紙の付いた以下の2つの束:

関係書類 N.AS0165/02 N.E.115

修復段階:前

資料:モノクロ写真 R498~R504, R548~R553 (パードゥレ・エテルノ教会の外観および壁画の写真など計13枚)

関係書類 N.AS0165/02 N.E.115

資料:図 (マッセッロ法での切断を示す図など5枚)

そのほかに展示用解説資料など数点在中

3.2 写真資料

パードゥレ・エテルノ教会の写真には撮影日が記されていないが、1957年6月15日撮影の記載があるサン・ヴィート・ヴェッキオ教会のネガ番号とパードゥレ・エテルノ教会のネガ番号を整理してみると、次のように撮影されたことがわかる。

1. R.493~R.497 サン・ヴィート・ヴェッキオ教会外観
2. R.498~R.504 パードゥレ・エテルノ教会壁画
3. R.505~R.547 サン・ヴィート・ヴェッキオ教会壁画*
4. R.548~R.550 パードゥレ・エテルノ教会壁画
5. R.551~R.553 パードゥレ・エテルノ教会外観
6. R.554~R.560 町の風景
7. R.561 サン・ヴィート・ヴェッキオ教会「聖マルティヌス」

* R.510およびR.538に1957年6月15日撮影の記載がある。
・パードゥレ・エテルノ教会のネガ番号が1957年6月15日撮影記載のあるサン・ヴィート・ヴェッキオ教会のネガ番号を挟んだ前後であることから、同じ時期に撮影されたと考えられる。

・壁画の欠損部分が多いため、画像にはあまり関心をもたなかったのか、撮影写真の枚数はサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画に比べて非常に少ない。

・現在、後陣中央の穴はふさがれているが、作業当時はまだ人が出入りできるほどの穴が開いていたことがわかる。

・壁画は相当に傷み、落書きが多く見られる。

・エットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館のサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画を移築した展示室の隅に無造作に置かれていた2つの断片「開かれた聖書」と「十字を刻んだ石」の2つは、2011年9月の本センターチームの調査によって、パードゥレ・エテルノ教会の四角く切り取られた穴にそれぞれあてはまると推論された。²エットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館2階の図書・文献資料室に保管されていた当時のモノクロ写真から、「開かれた聖書」のほうだけは確認することができたが、「十字を刻んだ石」については、カメラの画角からはずれていて裏付けができなかった。今回の中央修復研究所・記録文書保管所の写真(Fig.30)には側廊部分まで写っており、そこに「十字」が刻まれていることが確認できた。2つの断片の出所に関する推論は正しかったということになる。

・後陣の「パントクラトールのキリスト」の右下に描かれている「洗礼者聖ヨハネ」は、現地に残されている壁画と当時の写真を比較(Fig.31,32)すると、かなり異なった印象を受ける。写真が撮影された1957年から55年を経過するうちに描画層が剥落したり、石膏化が進んで壁画を白く覆ってしまったのではないと思われる。とくに右手首あたりは顕著で、洗礼者聖ヨハネが身にまとっていた「らくだの皮衣」(マルコによる福音書1:6)がほとんど見えなくなっている。

・右側壁に描かれた「聖レオナルドゥス」も、現在博物館に展示されているものと当時の写真を比較すると、まるで違う人物に見える。(Fig.33,34)写真では、まぶたが白く覆われ、目は半眼で下を向いているように見えるが、修復後では大きな目が正面を向いている。

・「聖ペテロ」の胸のあたりから左下に「聖母マリア像」を描いた別枠の壁画が上層に(したがって後世に)描かれていたことを示すモノクロ写真がエットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館の図書・文献資料室に保管されていたが、中央修復研究所・記録文書保管所の写真には枠線の1部しか写っていない。(Fig.35)現在、博物館の展示室には「聖ペテロ」の全身像(Fig.36)が展示されていることから、上層の「聖母マリア像」が剥がされたことはたしかであるが、その後の所在はわからない。所在どころか、「聖母マリア像」を剥がしたという記録すら残されていないのは不思議である。

3.3 図資料

平面図は教会全体ではなく、壁画のある後陣周囲だけの簡単な平面図であり、壁画をマッセッロ法で切断する際の作業工程も、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会のような詳しい図はなく、「stacco 分離」しか示されていない。しかし、平面図には「30. settembre. 57」とあり、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会にはなかった年の記載がある。

作業は10月9日に右側壁、12日に左側壁、17日に後陣右壁、

21日に後陣左壁の順で進められており、1957年8月8日付けの書簡に記されていた「15日間で全部を剥がすことができるでしょう」³という言葉どおり、13日間で終了していることがわかる。また、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会での作業(後陣の中央下の部分)がまだ終了していないうちに開始されていたということもわかる。

4. 終わりに

今回はローマ中央修復研究所・記録文書保管所に保存されていた写真や図などの資料を閲覧調査できたが、マッセッロ法という高度な技術がどのようなものであったのか、その実際を知るには限界があった。幸い、これらの資料調査の後、当時の壁画移動に関わったローマ中央修復研究所の修復士の1人であるジュゼッペ・モーロ氏(83歳)にローマで直接お会いして当時の話を聞く機会に恵まれた。モーロ氏は中央修復研究所に保管されている公的資料にはない作業風景などの個人アルバムを持っており、その公開はマッセッロ法の実際を知る上での貴重な資料となるはずである。

モーロ氏はマッセッロ法に対する私たちの(決して批判的立場からではない)関心の高さに驚き、これを機会に当時を思い出しながら詳細なレポートにまとめること約束してくれた。2013年1月に再会を約していたが、体調をくずして果たせず、6月に延期となった。モーロ氏のレポートが提供され、かつ2回目の聞き取り調査が実現すれば、次号ではモーロ氏のレポートを中心に半世紀前の歴史的マッセッロ法の実際をリアルに再現できるのではないかと考えている。

註

1. 『2011年度 研究調査報告書』「洞窟教会壁画の現状と美術史的考察」p.31-62 金沢大学フレスコ壁画研究センター
2. 前掲書 p.49,55,57
3. 前掲書 p.38

Ringraziamento :

Desideriamo esprimere la nostra più sentita gratitudine ai seguenti signori.

■Dott. Marco Riccardi (Responsabile dell'Archivio, Archivio dell'ISCR)

■Prof. Giuseppe Moro (ex- Capo Restauratore dell' Istituto Centrale del Restauro, Consulente della So.re. A. s.r.l.)

■Dott. Giuseppe Fabretti (Direttore del Laboratorio di Diagnostica Multispettrale di C.n.D. dell' Istituto Superiore per la Conservazione e Restauro)

ISTITUTO CENTRALE DEL RESTAURO
 ARCHIVIO DEI RESTAURI

N. Assoc. 101 (2)
 N. E. 15 (1805)

Ubicazione: GIANICA (in PUGLIA, IBA)
 frazione di GIANICA (BA)

Provenienza: GIANICA (in PUGLIA, IBA)
 GIANICA (in PUGLIA, IBA)

Autore-Epoca:

Oggetto:

Intervento di restauro
 IST. ALLA GIANICA
 GIANICA (in PUGLIA, IBA)
 di PUGLIA (in PUGLIA, IBA)

Fig.1

ISTITUTO CENTRALE DEL RESTAURO
 ARCHIVIO DEI RESTAURI

N. Assoc. 101 (2)
 N. E. 85 (1805)

Ubicazione: GIANICA (in PUGLIA, IBA)
 frazione di GIANICA (BA)

Provenienza: GIANICA (in PUGLIA, IBA)
 GIANICA (in PUGLIA, IBA)

Autore-Epoca:

Oggetto:

Intervento di restauro
 IST. ALLA GIANICA
 GIANICA (in PUGLIA, IBA)
 di PUGLIA (in PUGLIA, IBA)

Fig.2



Fig.3 (1957 年)



Fig.4 (1957 年)



Fig.5 (2011 年)



Fig.6 (修復前)

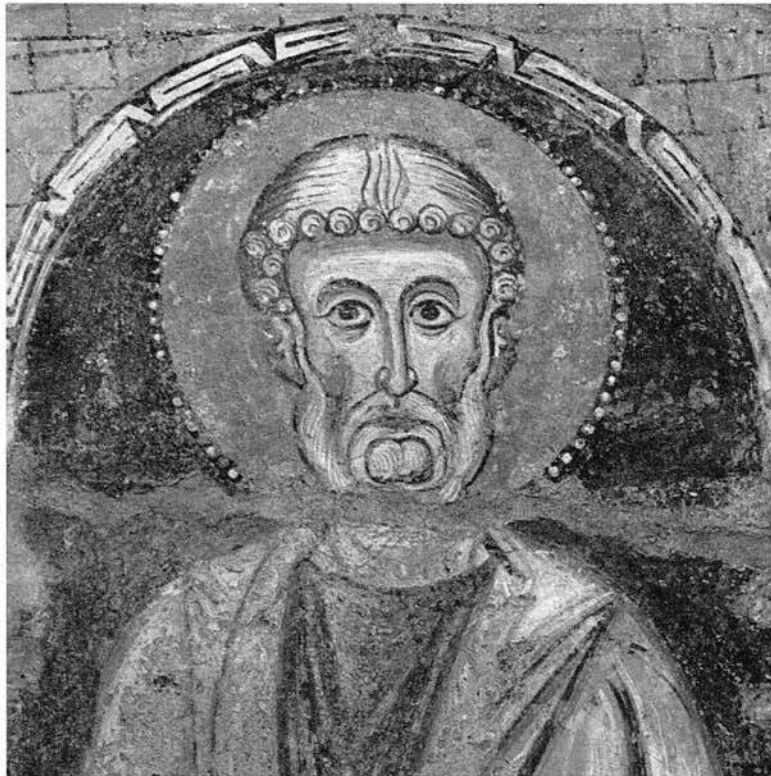


Fig.7 (修復後)



Fig.8 (修復前)



Fig.9 (修復後)

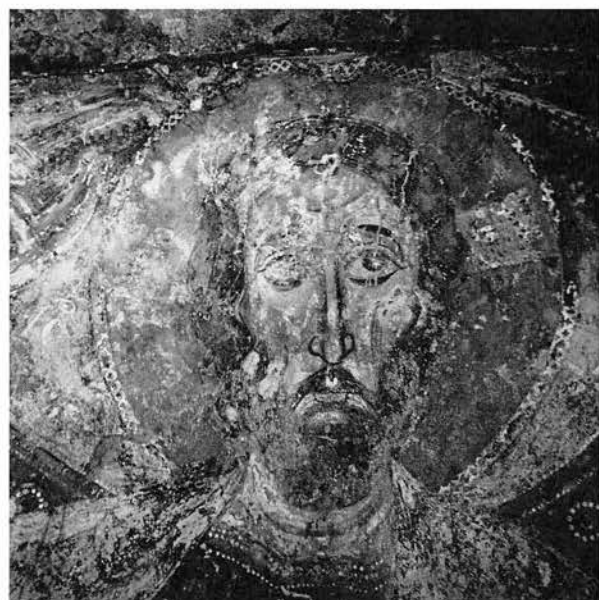


Fig.10 (修復前)

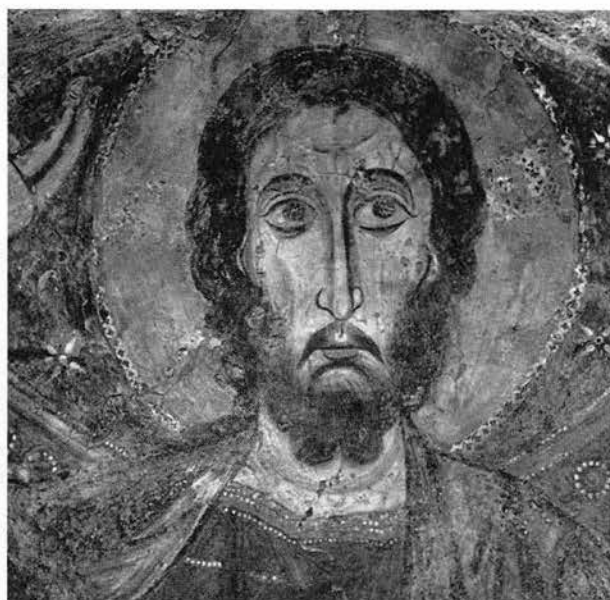


Fig.11 (修復後)



Fig.12



Fig.13

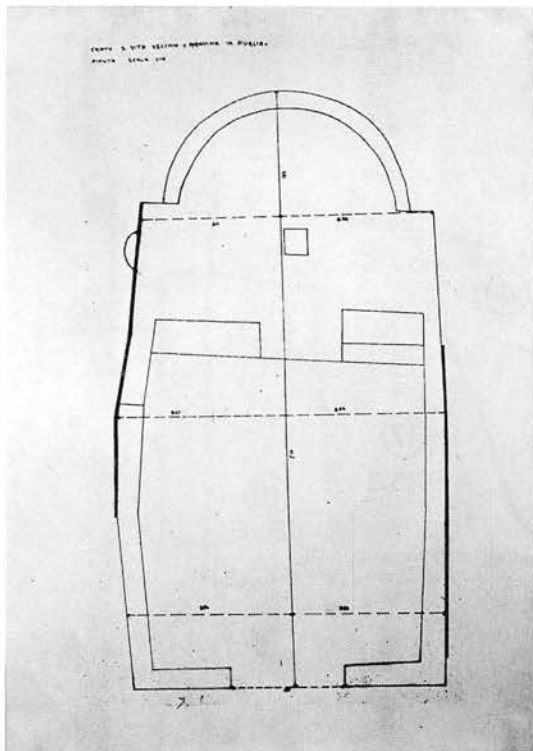


Fig.14

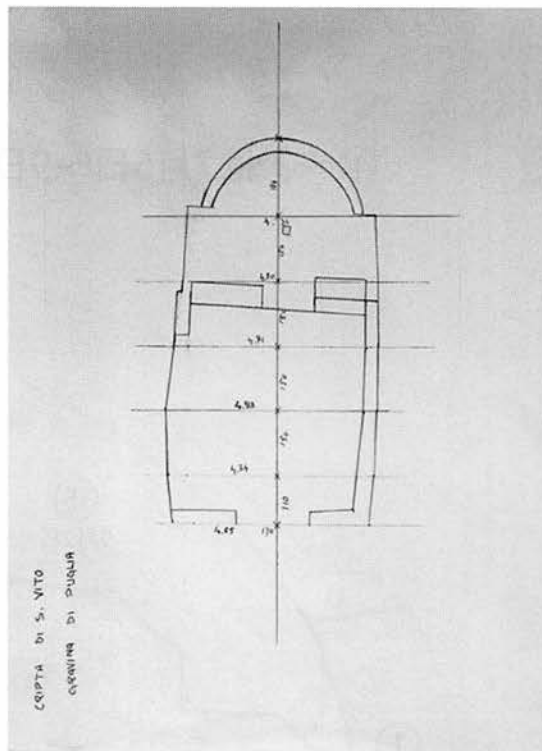


Fig.15

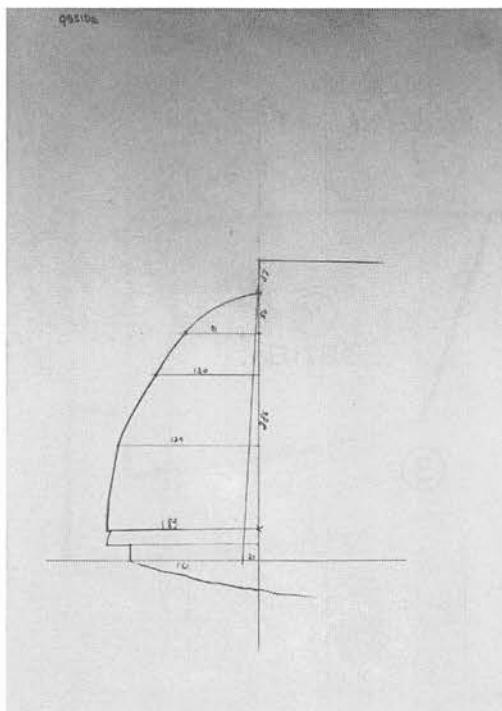


Fig.16

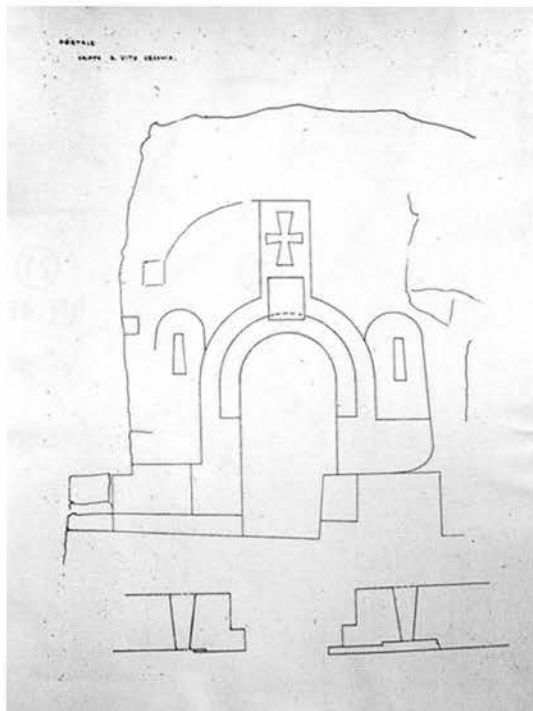


Fig.17

①~④は7月5日~9日

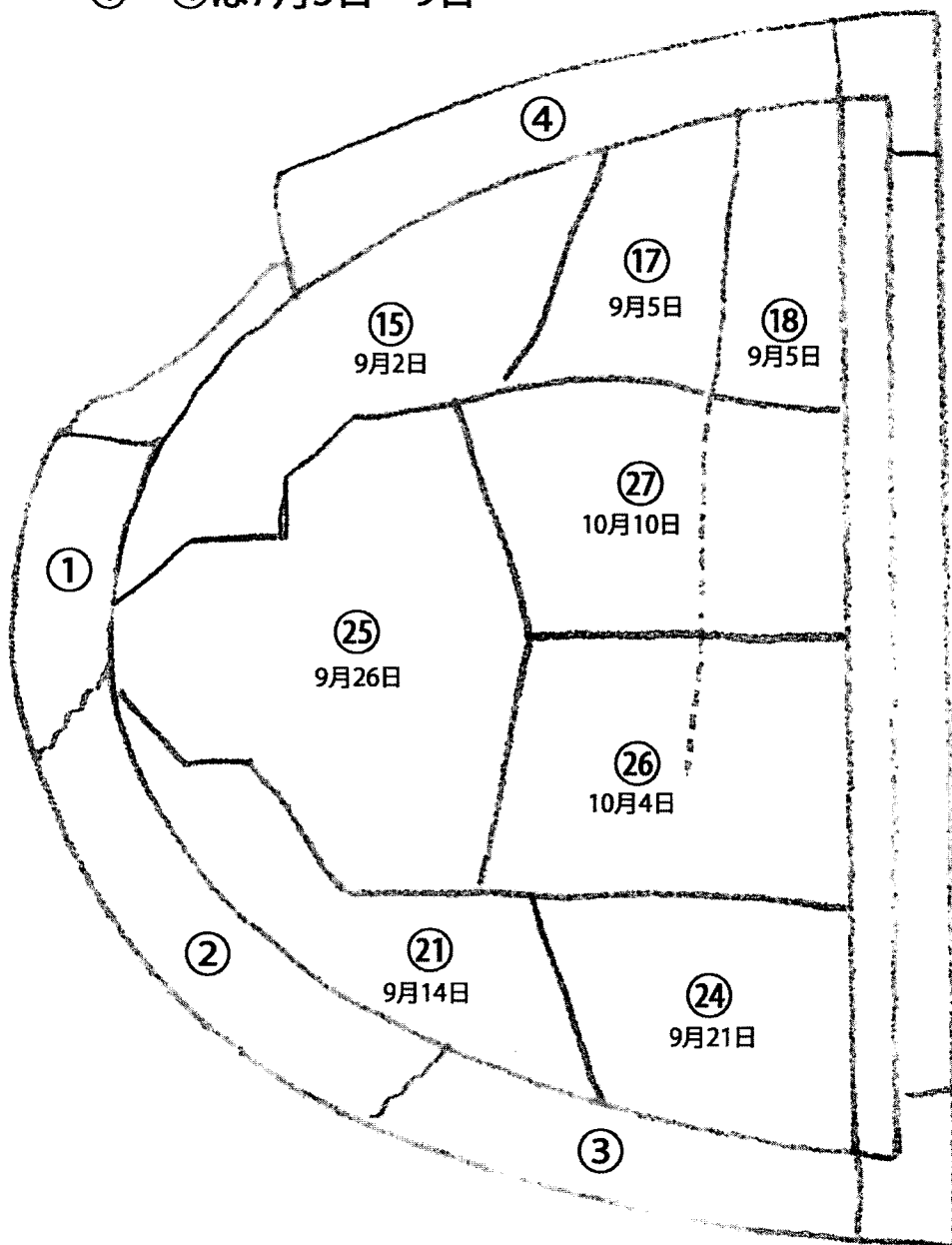


Fig.18

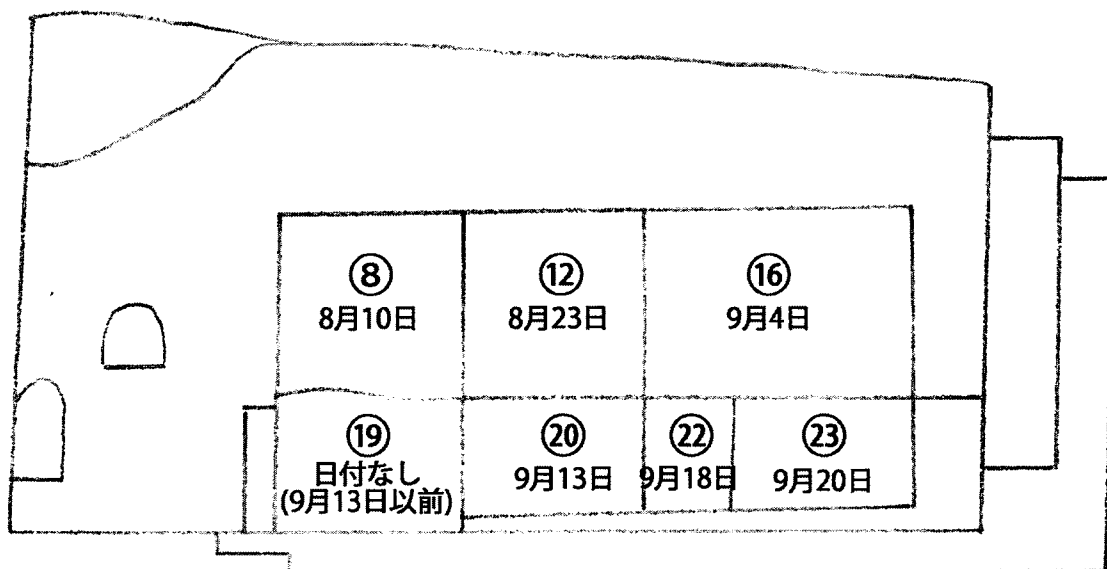


Fig.19

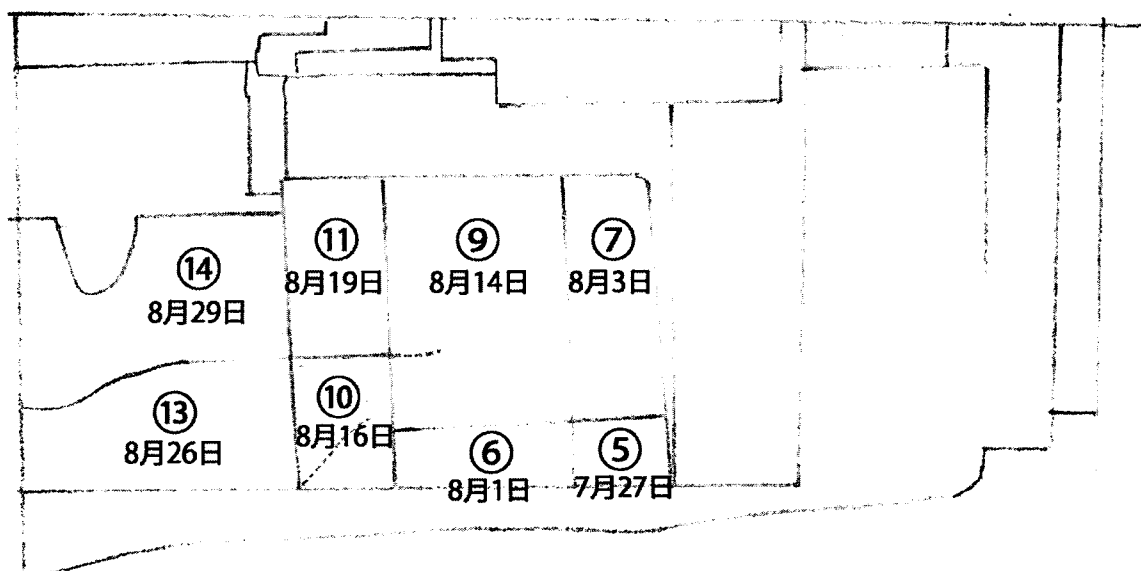


Fig.20



Fig.21



Fig.22



Fig.23

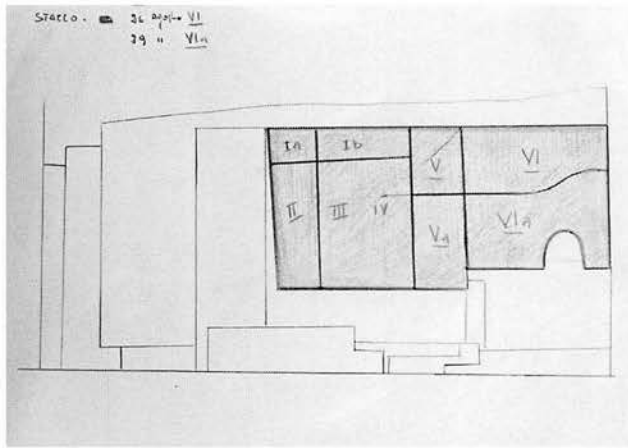


Fig.24



Fig.25

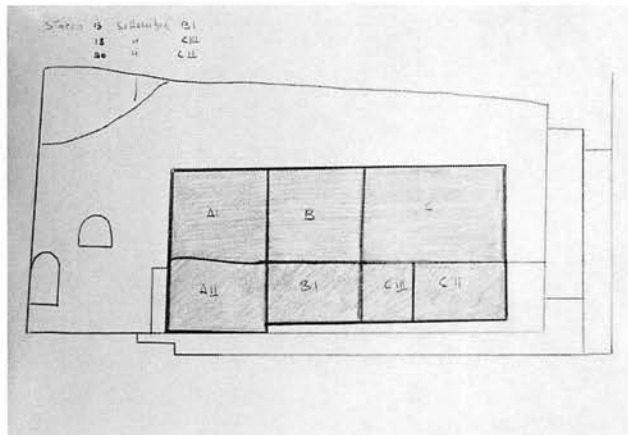


Fig.26



Fig.27

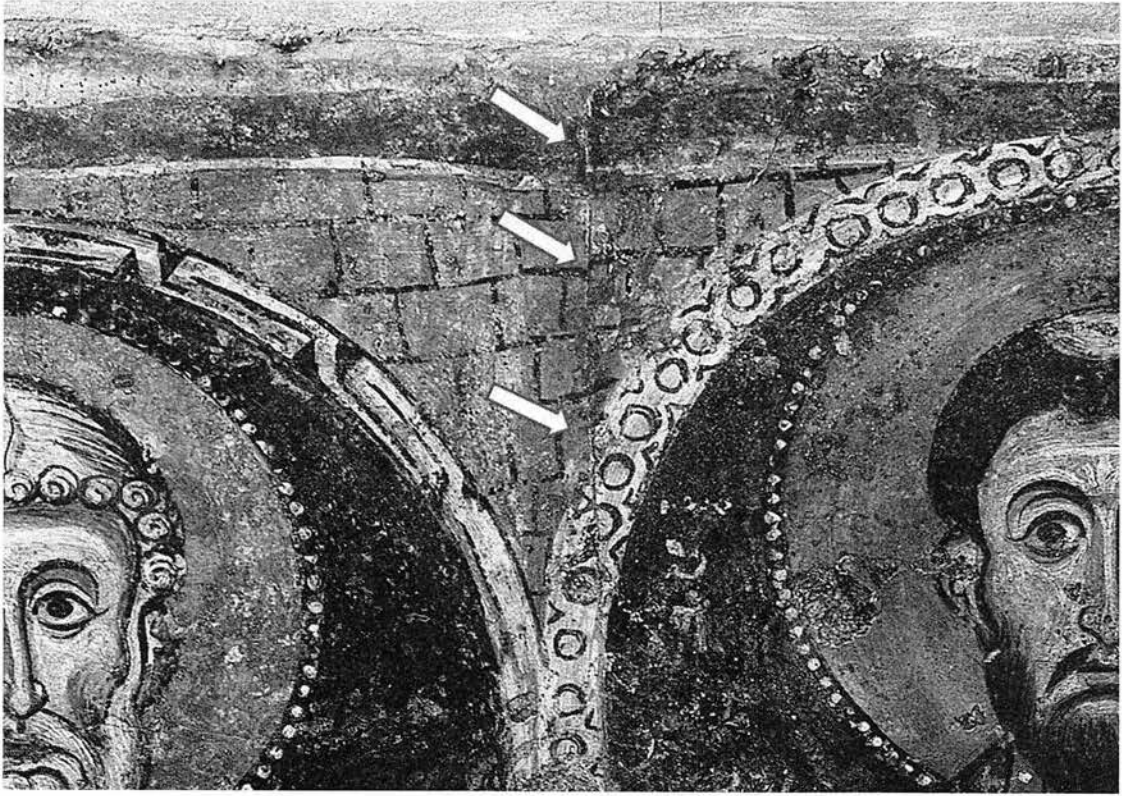


Fig.28



Fig.29

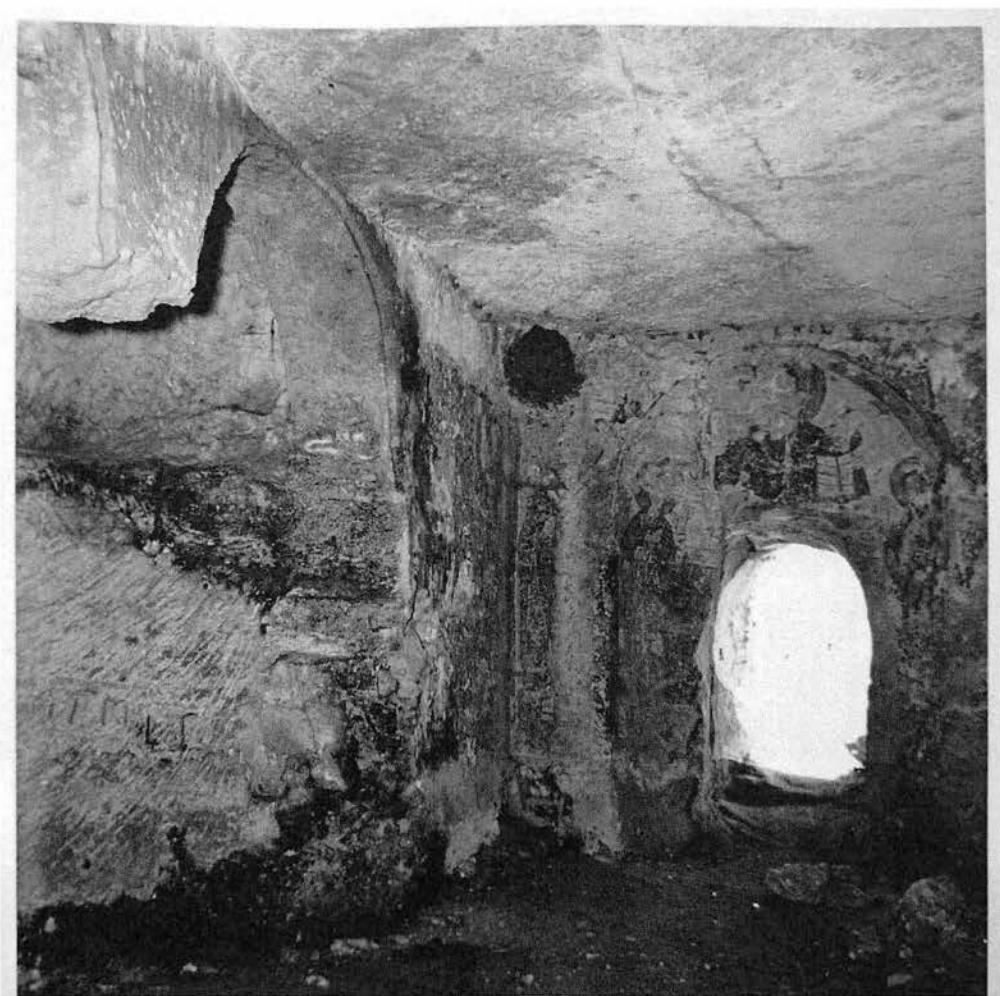


Fig.30



Fig.31 (1957年)

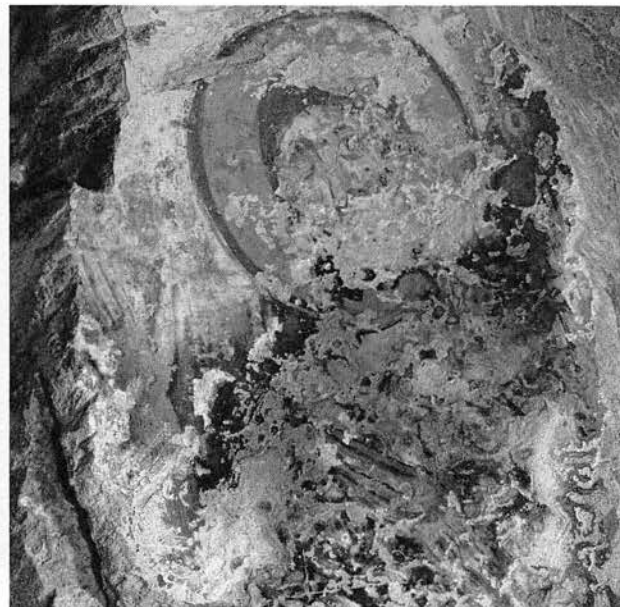


Fig.32 (2011年)



Fig.33 (修復前)



Fig.35 (修復前)



Fig.34 (修復後)



Fig.36 (修復後)

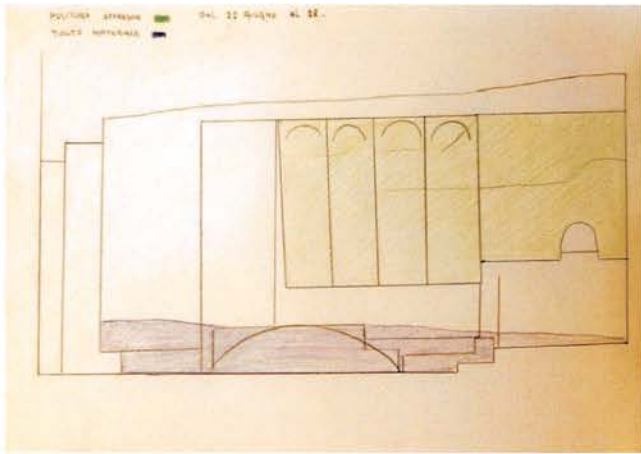


Fig.37

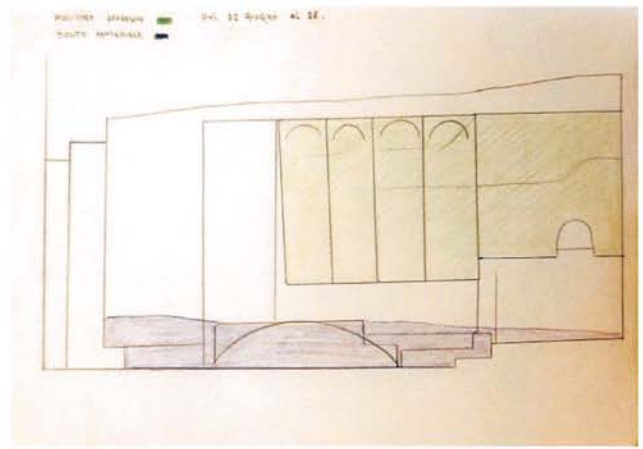


Fig.38

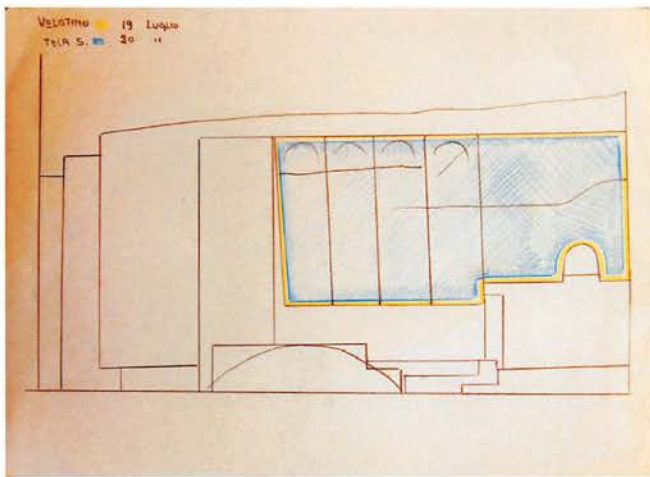


Fig.39

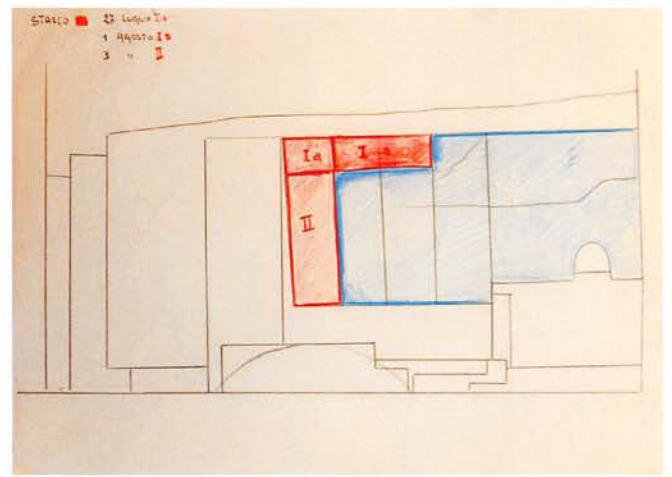


Fig.40

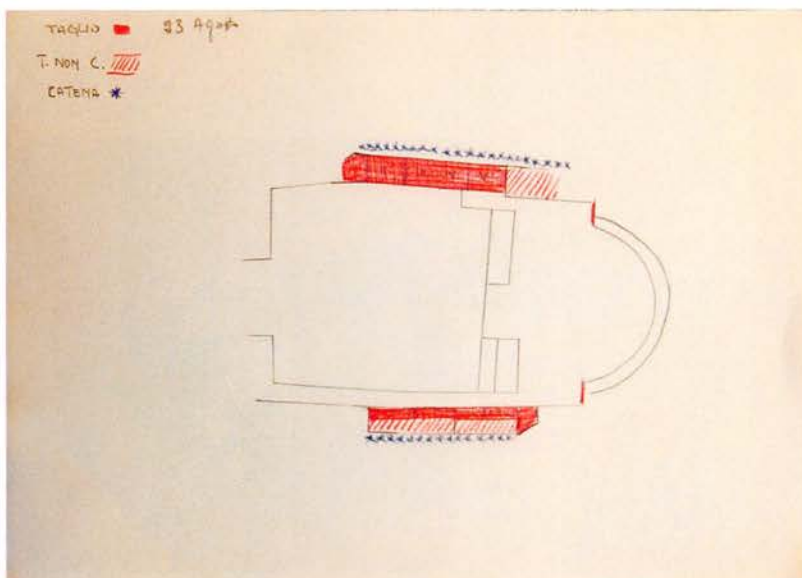


Fig.41

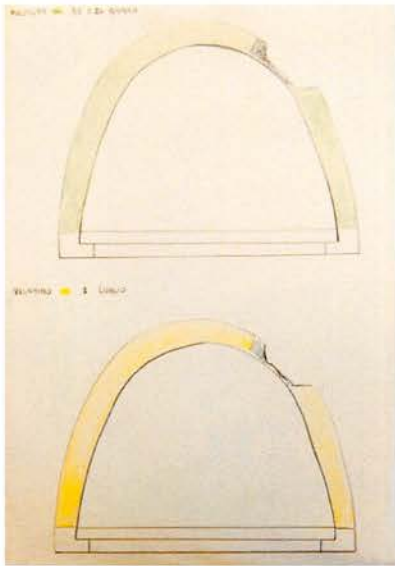


Fig.42

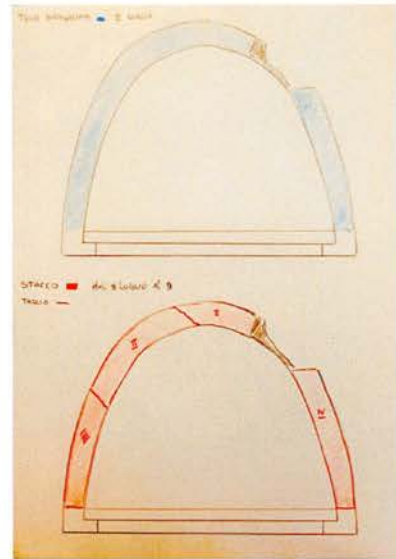


Fig.43



Fig.44

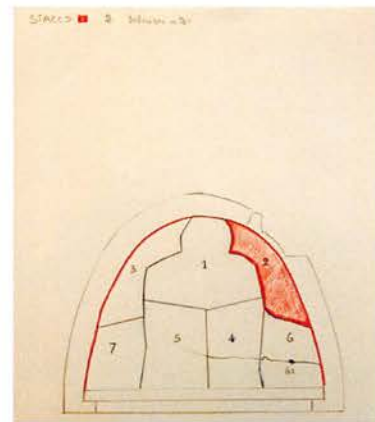


Fig.45

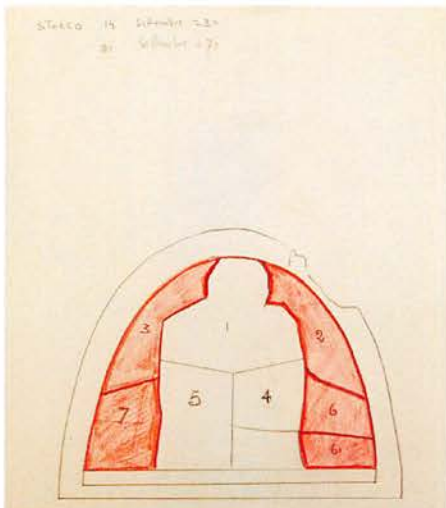


Fig.46



ローマ中央修復研究所にて 右から2番目がモーロ氏